

演題番号:13

テーマ 5:公衆衛生危機

人々は本当に水を煮沸しているのか？

ーラオス人民民主共和国の農村地区における観察的研究ー:研究プロトコル

川本 沙瑛¹、野中 大輔¹、Inthavong Nouhak²、Vixayyang CHAYVANGMANH¹

¹ 琉球大学大学院保健学研究科

² Lao Tropical and Public Health Institute

【背景】 下痢は5歳以下の子供の主要な死因であり、年間約52.5万人の子供が死亡している。特に家庭での水処理(Household Water Treatment : HWT)は下痢のリスクを減らすために重要である。このHWTについて、DHSでは自己申告のみで測定されている。衛生習慣の自己申告において、人々は自分の行動を過大に報告する傾向がある。そのため、HWTの測定の妥当性には懸念がある。

ラオス人民民主共和国は、東南アジアに位置する中所得国である。2015年にラオスの5歳以下の子どもたちに起こった下痢の回数は約100万回と推計されている。ラオス社会指標調査によると、農村部の60%の世帯がHWTを行っている。農村部における最も多いHWTは煮沸消毒(59.8%)である。しかしこのデータは自己報告によって測定されたため、測定の妥当性について懸念がある。この調査の目的は、水を煮沸していると自己申告した世帯の中で、調査時に煮沸させた水が観察できた世帯の割合を明らかにし、自己申告によるHWT測定の妥当性を評価することである。

【方法】 ラオスのサワンナケート州セボン郡にある4村、合計108世帯にインタビュー調査と観察調査を行う。インタビューでは、社会経済的および人口統計情報、および水の煮沸に関連する情報を収集する。観察調査では、やかん、かまどなど煮沸に関わる設備、物品を観察する。得られた情報を元に、1:煮沸した水が存在する割合の信頼区間を計算する、2:自己申告による測定の感度を計算する、3:収集した情報に対して記述的分析を行う。

【考察】 本研究では、HWTを測定する上での自己申告の有効性を明らかにすることができる。また、HWTの測定について、よりよい測定方法を提言することで現地の公衆衛生の向上に貢献することが期待される。